

【曲目解説】

モーツァルト（1756・1・27～1791・12・5）の神童ぶりを伝えるエピソードは多いですが、歌劇の分野では、宗教的ジグシュピール「第1戒律の責務」K35という作品を、10歳で書き上げています。とにかくこの手の挿話には事欠かないモーツァルトですが、有名なものとしては、「フィガロの結婚」「ドン・ジョバンニ」「魔笛」が上げられるでしょう。もちろんこの他にも魅力的な歌劇はありますが、何と言っても、「フィガロの結婚」の楽しさは格別だと思われます。その序曲も歌劇の雰囲気を表し、何度聞いても、爽快で、愉快的気分させてくれる名曲と言えましょう。

ヴァシリー・カリンニコフは、1866年1月13日に生まれ、35歳を迎える直前の1901年1月11日に亡くなったロシアの作曲家です。ほぼ同年代の作曲家としては、シベリウス、R.シュトラウス、ニールセンなどがいます。若くして亡くなったために作品の数も少なく、知名度は低いですが、最近になって、2曲の交響曲が代表作としてよく演奏されるようになりました。彼の作品は、美しい民族的な旋律、色彩的な管弦楽法が特徴です。本日演奏する間奏曲でもその特徴が生かされ、一聴、ロシアの作品とわかる雰囲気をもっていますが、チャイコフスキーなどとも違う個性が十分に感じられます。もっと知られてよい佳品と言えましょう。

フランツ・アントン・ホフマイスター（1754・5・12～1812・2・9）は、モーツァルトより2歳年上のオーストリアの作曲家です。あまり知られてはいませんが、66曲とも言われる交響曲を始め、全てのジャンルに数多くの作品を残しています。が、実は、作曲家としてよりも楽譜出版者として名を馳せていて、ハイドン、ベートーフェンなどの作品を出版しています。中でも、モーツァルトは彼に借金があり、その返済の代わりとして、彼の出版社のために曲を書いたと言われていています。本日のヴィオラ協奏曲は、自筆原稿が残っていないため、作曲の経緯等詳細は不明です。唯一残っている写譜には誤記と思われる部分が多く、後年出版される際に、校訂者によって様々な手が加えられる結果となっています。現在複数の版が存在し、小節数や、さらには曲自体が違うものさえあります。数少ないヴィオラ協奏曲というジャンルでは代表的なものであり、なかなか魅力有る作品であります。

ヨハネス・ブラームス（1833・5・7～1897・4・3）が、その第1交響曲を書き上げるのに、20年以上もの歳月を要し、43歳にして完成させたという挿話は有名です。モーツァルト8歳の交響曲などとは比べるべくもありませんが、ブラームス同様大器晩成型と言っていいベートーフェンでさえ30歳で最初の交響曲を書き上げています。ベートーフェンを尊敬し、その九つの交響曲がある限り、もはや交響曲を作曲することは無意味だとさえ考えていた時期のあったブラームスが、そのベートーフェンの重荷を超えて、「ブラームスの交響曲」を作るには、彼が人並み外れて厳しい自己批判力を持っていただけに、筆舌に尽くしがたい努力があったと想像されます。そしてその仕上がりは、ベートーフェンを受け継ぎつつ、ブラームスの個性が十二分に刻印された傑作となりました。冒頭、ティンパニーの轟く中、全管弦楽がC（ド）を奏する完全な秩序は、瞬く間に上行と下行の二つの旋律線に引き裂かれ、不協和音が渦巻き、膨れ上がります。人生の謎と不安、苦悩と憧れ、意志と信仰、それらを緻密に組み立て、様々なドラマと葛藤を描き出すこの交響曲は、全管弦楽の壮麗な「アーメン」によって締めくくられます。